

特41

756

忠臣蔵

256

237

白樂天

^上唐の天子は賓客を白樂天と稱す

天と稱す也扱も是より東

當りて國ありて名を日本と名づ

く。志は去りて。日本への智恵を

これらの賓客は伊賀の今海路

類作舟漕せりて見ゆ

423-21

其方乃國を尋し東海の波路
 ちるは行舟の影は入日の影
 残る雲の旗手乃天津を月ま
 出る其方よりよみえうめく程も
 あり日本之地は遠きはまりく
 海路をへて急行程は果へるや日
 本之地は遠く程は果へるや日

日本のおやうを詠めたるやとあり
 志らぬひら飛雲の海の朝ほらま
 月乃ち満る氣色を那巨氷漫と
 して碧浪天をひて朝を辞せり
 もんきいが扁舟は棹をうのむをある
 其湖の煙乃浪のよかくやとねひまら
 れたり雲面自の海はあや松浦なる

白雲

下

西の山ありき有明乃月の入雲も
浮きも雪降舟くたぐひはかたあ
さ海をい海へうか唐土の船路乃
旅も幸からで長泊りと聞か
月も程あさる跡なく
萬里の波濤をまのま日本なる地は
まつる身は小舟一艘浮つる

漁翁也いかにあき成る日本なる者ら
出んは是れ日本の漁翁とて唐土
を唐の白樂天とてまはま
かかた始り此は渡りたるを白
樂天とみるなり行の故もてかた境
其身は漢土の人あき其かたは
て日本はまの隠れあきれあり

たしひ其の國にたうれりてや
ぐてん怒りあへんまじり思をれま
日本ミコトの智慧ササとらんて樂天ガクあり
ゆるまとのゆえにあまねる日本の本
西と縁めて沖の方より航するゆ
まづ人毎もまじりてしるるづ
今やササくササ松浦マツウラ飛トビく

仲も交てかられたる唐土カラ船のから
人を樂天とみるゆり行からあある
まむつらやちや唐人カラヒトあれは
は言葉とみるもまじりた意
す釣棹ツクサの眼メも釣ツクをまじり
物モノと尋ねヒトあつあつと尋ね入
あつは漁翁イサノヲ毎ツネ日ヒあつてつら

歌^{モリヤク}がう^{シテ} 叔唐^{ウカトウ}ちよ^{シテ}うけ^{シテ}ひら^{シテ}と歌^{シテ}ひ^{シテ}吟^{シテ}
作^{シテ}ぞ^{シテ}唐^{ウカ}の詩^シを^シ作^シつ^シく^シ時^シが^シ又^シ
日本^{ニッポン}も^シ多^シう^シな^シま^シて^シ人^シの^シ心^シを^シ慰^シむ^シ
引^シも^シ予^シこ^シき^シら^シな^シく^シ天^シ竺^シの^シ書^シ
文^シと^シ唐^{ウカ}の^シ詩^シ賦^シと^シ唐^{ウカ}の^シ詩^シ賦^シを^シ
ま^シつ^シて^シ新^シ朝^シ乃^シ多^シく^シは^シお^シび^シ三^シ國^シを^シ
や^シう^シら^シき^シ来^シる^シも^シお^シて^シ大^シな^シや^シう^シら^シく^シと

お^シて^シ大^シな^シや^シう^シら^シく^シと^シあ^シら^シれ^シ
て^シ今^シ昔^シの^シ物^シは^シあ^シら^シな^シく^シた^シめ^シは^シあ^シ
い^シや^シ且^シ儀^シあり^シあ^シら^シく^シは^シら^シる^シ目^シ前^シ
の^シ氣^シや^シと^シな^シる^シ作^シり^シて^シな^シる^シ昔^シ
昔^シを^シた^シら^シび^シて^シい^シは^シら^シる^シ唐^シの^シ書^シに^シ
白^シ雲^シも^シは^シた^シく^シ此^シの^シ腰^シに^シあ^シら^シる^シ
一^シつ^シの^シ漁^シ翁^シ昔^シ昔^シの^シ事^シを^シあ^シら^シる^シ

帝尊承は...
日本は...
...
天皇の...
...
梅は...

陽每朝...
字は...
乃詠...
...
...
...
...

...

...

ありては悔乃償のまゝなり救ふは生
とていさるも何れも多きまゝあり
古事記
たつや和國の風俗の如くはありける海
土人の心も有様ま習ひしれ 和
國のもく遊び和歌をえりて舞
歌の曲も其をことと顯れしそまわ
がくも亦びとをまわくははむらん

誰とくもははむらん
此舞樂の 鼓も浪の音笛も籠
乃吟も亦も舞人へけ録が老の
あゝるよなたるも海は浮ひつ
青樂とまもアヤ合の茶茶も 國も
動くも萬叶集の山陰のうら
水のもも海の 浪もはるまの海

白紙

青樂^{アヲ}東^ト西^ニの海^ノあを^ニまが^ル原^ノ波^ノ
同^ノより^ノ題^ノき^レ住^ル吉^ノ神^ノ其^レ又^ニ
す^レの^レか^レす^レの^レ若^クあ^ラま^レ出^ル
美^ノ信^ノ吉^ノの^レま^レ又^ニ吉^ノ乃^レ神^ノの^レち^レら^ラ
乃^レあ^ラん^レ程^ノも^レ目^ノ本^ノを^レ隨^ニ入^ルま^レせ
給^ルれ^ルも^レや^レ浦^ノの^レ波^ノ立^ルゆ^レ給^ル人^ノ
樂^ノ天^ノす^レま^レ又^ニの^レ現^ル給^ルむ^レく

伊^ノ分^ノ石^ノ清^ノ水^ノ賀^ル茂^ノ乃^レ鹿^ノ鳴^ル云^レは
詠^ル歌^ノ契^ル由^ル安^ノ藝^ノの^レ殿^ノ身^ノ乃^レ明^ノ神^ノ者^ノ
倭^ノ國^ノ龍^ノ王^ノの^レ弟^ノ三^ノ乃^レ姫^ノも^レあ^レて
海^ノと^レま^レう^レの^レ母^ノで^レ海^ノ音^ノ樂^ノを^レま^レす^レ以^テ
給^ルた^レハ^レ伏^ル龍^ノ王^ノの^レ弟^ノ三^ノ乃^レ母^ノ乃^レ曲^ノを^レ
了^ルる^レ海^ノ乃^レか^レま^レり^レつ^レた^レま^レ以^テ遊^ルふ^レ
小^ノ長^ノ乃^レ年^ノの^レ手^ノ乃^レ神^ノ乃^レま^レぎ^レの^レ吹^ルき^レも^レ

256

237

複製下

宗家
観世

明治廿二年六月廿五日従
同 廿四年一月廿八日迄 出版御届済
同 廿三年四月廿五日従 再版
同 廿四年十月廿五日迄
同 廿四年三月十五日別製本御届

訂正者 観世清

發行兼
印刷者

京都市上京区三条通美屋町東光角

常 之

観世清

(特電話ニ至)

電話會社大段ニ至

常 之

あまのうつくしき
いづれもなき
かたもなき
ひきけり

